北天女神譚異聞～強がりの代償～

羽 衣石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
北天女神譚異聞～強がりの代償～

【Ｎコード】
Ｎ５８１８Ｉ

【作者名】
羽　衣石

【あらすじ】
人間一生懸命やってても何がしかの失敗はするもので、おそらくは女神でもそんなことがあったりするのではないか・・・というような思いつきから書き始めました。「ベルダンディーがそんな失敗はしないでしょう」と思われる読者の方にはどうかご容赦のほどを。

前編

アスガルド。天上界と呼ぶ者もいる、神々の住まう所である。三層九界に分かれる宇宙の上層に位置し、最も強い光りに溢れる世界である。中央に最も巨大な世界樹であるユグドラシルがそびえ立ち、大地から吸い上げ葉に集めた力を、世界に住む者たちに余すところ無く注いでいた。

ある日、アスガルドの美しい女神の一人が人間の世界へ降臨する。そしてある男と恋をして幸せに暮らすようになるのだが・・・この物語はそれよりも少し前の出来事である。

「あなたの願い叶えます。何をお望みですか？」

実際のところ天上界にお助け女神事務所が開設されたのがほんの二十年ほど前と言うわけではない。従って前述のような台詞を直接女神の口から聞いた者の数は決して少なくないはずである。女神の救済は人間のみならず妖精界精霊界もその対象とされているから、エルフやドゥワーフなどもその数に含まれる。もともと神属の存在を知覚する彼らはともかく、直接女神の救済を受けた者がいるにも関わらず未だ人間界で神々が実在すると認識されないのはなにゆえか。

世界樹の力が弱体化した人間界において直接的に神属と触れた人間は強い力を得ることになる。しかし破壊力の高い戦斧を持つにそれを振るうだけの腕力を必要とすることと同様に、神格を高めるつまりその精神性の向上が無ければ得た力はあっさりと暴走を引き起こすのだ。神の側で止まった振り子は勢いをつけてたやすく魔の側に傾いてしまうのである。ある魔属の言葉を借りるなら、

「結局最後は、がしんたれに喰われてまいよんねん。」（#要出典）

と言うことになるのであろう。

そのため人間界において女神の救済を得たほとんどの者が、その

記憶を消されることとなる。残るのは実現された願い事の結果とそれに伴う幸福感である。「女神の干渉によりアスガルドのいくばくかのエネルギーを人間界にもたらし幸福量の総量を僅かずつでも増加させ、それにより人間界で失われた世界樹の力を復活させ神属側へ取り込むこと」を目的とするのであれば、必要なのは女神によってもたらされる幸福であって女神と出会った幸福ではない。

　前段の記述はお助け女神事務所設立準備委員会が登記にあたって、中央政庁に提出した新規事業開設申請書の事業目的の欄に記載された文言の抜粋である。目的とされたのは人間界の世界樹の生長であって、決して人間の種としての生長ではなかった。それは神々が手を差し伸べても容易に成るものではないし、安直な生長の副作用についても最高評議会では十分に議論され危険視もされていた。

　しかしその副作用よりも永劫とも言える生長期間に絶えていく数多の命に目を向ける神属もいた。彼は優しい神だった。後の世に彼は多くの者の幸福を願い、最高評議会を始めアスガルドの神々を敵に回しても自分の信念を貫き行動を起こす。が、それは失敗に終わり彼の身近な者の心に癒しがたい傷を残してしまった。結局のところ彼もまた、がしんたれに喰われてしまったのだ。

「この旅館がつぶれてしもうたのは、もはや致し方ねえと諦めておりますじゃ。しかし、このまんま村が寂れてしまっては、ご先祖さま方に申し訳が立ちません。わしゃ死んでも死に切れんです。女神さま、お願(ねげ)えですだ。どうかどうか、村の温泉を昔のように湧(ゆ)き出させて下せえませ。」

　老人は破れた畳に額をこすりつけるようにして、ベルダンディーを拝んでいた。人間界からの電話を受け、彼女は山村の古びた温泉地の外れにある荒れ果てた宿に降臨した。すでに倒産して十数年を経たと思(おぼ)しき建物は屋根が落ち壁も崩れ目も当てられぬほど荒廃していた。代々続いた旅館の跡取りであった彼は若き日に放蕩を繰り返していたが、旅館が会社組織に改められた時に都会から来た資本

家たちに経営権を奪われてしまった。旅館を追われ各地を転々としていたが、景気が悪化し旅館が倒産したことを知り帰ってきた。その後生涯をかけて旅館の再建を図ったものの、源泉の湧出に陰りが見え始め温泉地そのものの活気が急速に失われていった。やがて病に倒れた彼が、主治医へかけようとした電話が天上界へとつながったのである。

「わかりました。温泉を湧き出させる、でよろしいのですね。」

ベルダンディーが目を閉じて静かに祈りを捧げる。額の紋章が輝き、料金滞納で送電の停められた暗い部屋を青白い光が満たしていく。ささやかな願い事であればそうでもないのだが、その規模が大きくなれば天上界への伝達のために大きな力が働く。狭い室内の空気が渦となり、契約者の強い願いとベルダンディーの祈り、そしてこの地の自然の息吹が一体化し一条の矢となって天空へと打ち放たれた。このような場合それが家屋の天井を突き破り大きな穴を開けてしまうことがあるのだが、本件では依頼者の住居の屋根にはすでに穴が開いていた。

依頼内容の如何を問わず、まずはこのようにして契約者の意向と担当者の支援計画がお助け女神事務所へと伝達される。受領されたエネルギー体は専用の装置で支援計画書（プラン）として光紙面に、担当者の電子神押も自動で捺印されて印刷される。この時サービス課に属する別の女神が契約者について評価（アセスメント）を行う。ここで魔属と接触の有無など依頼者の身元確認や、担当者の能力のみで実現可能か周辺の自然環境の利用や事務所のシステムによる助力の必要性があるかの判断を行う。

出来上がった支援計画書と評価票（アセスメントシート）は、次に管理課に回される。担当者単独の支援で解決可能なケースは管理課スタッフの審査で担当者に返されるが、今回のように契約者の存在する自然界への力に働きかけるような場合は管理主任の判断を仰ぐ。さらにアスガルドの他の機関への協力要請が必要となれば事務所長、現体制では事務次長の決裁が必要になる。今回はお助け女神事務所のシステムからベ

ルダンディーを通して周辺地域の地脈や断層、地下水流への干渉が行われることになり、管理主任の指示のもとプログラムの発動が準備された。実際の発動のタイミングは、地上界での様子を確認する評価者と担当者との判断に委ねられる。

こうした一連のプロセスを経て願いは叶えられるのだが、当の契約者にしてみれば光が上空に飛んでほんの少し後にこの台詞を聞くことになるのだ。

「あなたの願いは受理されました。」

「本当ですだかあ！」

足腰の力を失いかけた老人が立ち上がって両手を差し出し、ベルダンディーはその手をしっかりと握り優しい笑顔を向けた。そんな二人の足元を水が流れ始めた。二人が床を見下ろすと万年床の煎餅布団がひかれた古い畳の上を流れる水が次第に水かさを増していき、それに伴い水は湯へ、やがて熱湯へと温度を上げていった。老人が火傷を負う直前にベルダンディーは彼を抱え上げ宙に舞った。その直後室内を洪水が襲った。

故障したまま放置されていた地下の源泉供給設備が破裂し、熱湯が建物の一階部分にあふれ出してきた。細い右腕で老人を抱きかかえる形で室内に浮遊していたベルダンディーだったが、とっさに左手を頭上に掲げ突風を起こして天井に空いた穴を広げるとそこから外へ飛び出した。一秒間で四十メートルの高さを上昇したため、老人はその体に受けた圧力で気を失った。だがそれは彼にとって幸運であったと言うべきだろう。

彼らが飛び出した直後、今までいた部屋を含む一階部分は全て濁流と化した温泉の流れで埋め尽くされた。地上三階建ての建物の二階まで湯が流れこんだ時、下階の古い壁は水圧に抗しきれず決壊した。地下からあふれ出す温泉は毎秒二十トンを優に越え、建物内部の物を全て押し出していく。やがて大きな柱も水流に巻き込まれ、なぎ倒された。支えを失った建物は屋根瓦も梁も、各階の床も天井も全てが一気に崩落した。かつては旅館だった物を飲み込んだ熱湯

の洪水は高台から林の木々をなぎ倒し、土石流となってなおも治まることの無く湧き出し続けていた。
　少し離れた街並みからサイレンが鳴り始める。ベルダンディーは老人を抱えたまま、空中から眼下で広がる災害を呆然と眺めていた。

「申し訳ありませんでした。」
　お助け女神事務所の会議室で、ベルダンディーは居並ぶ他の女神たちを前に深々と頭を下げた。長い亜麻色の髪が白磁の真新しい会議用テーブルに垂れかかる。この会議室自体が新たに設けられたもので、内装工事を終えてまだいくばくも経っていない室内に新品の壁紙特有の匂いが残っている。事務次長は所長たる女神総長の意向で新設された役職（ポスト）であるが、この任にあたることとなったイドゥンは自らの専用オフィスを建物の中層付近に設けた。所長室は事務所開設当初から最上階に置かれていたが、彼女はそれに倣（なら）わずより現場スタッフに近い位置へ自らの身を置くことを決めた。そして事務次長と各課責任者が事務所運営について話し合う会議室を同じフロアに新しく用意した。この合議体こそが所長不在のお助け女神事務所に於ける最高意志決定の場であり自分はそのまとめ役に過ぎない、イドゥンは棟内の配置を改めることでその意向を表明したのだ。
　ベルダンディーが頭を下げる様を円卓を囲む女神たちが痛ましげに、一部の者は冷ややかに見つめていた。ベルダンディーを含む事務所運営を諮（はか）る七人の女神たちによる合議体である。事務次長、経理主任、サービス課のリーダーであるアンネローゼ、ミソラ、フレイア、そして管理主任。このうち最後の二名が非限定クラスの一級神格を有している。
「顔をお上げなさい、一級神ベルダンディー。」
　抑揚なく話しかける事務次長の、フレームレスの眼鏡の下の視線は厳しい。アンネローゼとミソラの二人は気遣わしげに様子をうかがっていた。二人にとって年少の同僚であるベルダンディー、二人と同じく天女出身の身で事務次長の職責を担うイドゥン、その両者

がかつての学友であることを知っているからこそイドゥンの心情を察してやまなかった。
「事故の経緯については、報告書とあなた自身の申告でよく理解できたと思います。法術発動のタイミングを焦るとは、あなたらしくないミスをしましたね。出力確定前に起動させてしまったがために、過剰なエネルギーが人間界の大地を刺激し過ぎてしまいました。」
　一人立ったままのベルダンディーはうつむいて視線をテーブルに向けていた。そのことにイドゥンは内心ほっとしていた。彼女の目をまっすぐ見ていたらこんなに冷たい言い方ができただろうか。
「みなさんから何か質問は？」
　濃金髪（アッシュブロンド）を美しく編み上げたアンネローゼが発言を求めた。彼女は所属女神の天女出身者としては最も優秀であり、女神総長の秘書を務めた経験もある。
「契約者の依頼については結果的に達成されたと判断して差し支えないでしょうか？」
　次長に促され経理主任が回答した。所長秘書室は一旦解散し神員（じんいん）をサービス課と管理課に振り分けたため、事務次長の秘書役は経理主任が兼務している。これにはイドゥン自らが雑用までこなすため従前ほどに秘書が必要ないと言う理由もあった。
「依頼の内容は契約者のいる地点だけでなく地域全体の温泉湧出の活性でした。地域内全ての源泉の活性化が確認されていますから、問題は事故の被害を相殺して将来的に地域内の人間たちがどれほど幸福を感じると評価するかと言うことかと思いますが。」
「被害状況は？」
　紺青のカーリーヘアとそばかすが印象的なミソラが続けて尋ねる。
「他の源泉については一切暴走を起こしていません。事故のあった旅館とその土地は転売されていたのを契約者が買い戻していたこと、そこが多くの住民の居住区から外れていたこと、さらに周辺が公有地であったことにより第三者の人的及び個人資産について被害は認められていません。ですが土石流の被害については復旧の負担が住

民自治体に課せられることになりますから、経済が低迷して租税減収に陥っている状況下では痛手であると思われます。」

「びみょ～。」

　ミソラが天井を仰ぎ見た。いつも大げさな身振りや言動で部下や周囲を盛り上げるお助け女神事務所のムードメーカーであるが、対神（たいじん）関係にひどく敏感な一面も持っている。

「言っちゃなんだけどそんなに大（おっ）きな被害じゃないでしょ。次長、これ所轄に届けなきゃだめ？六二六八条に引っかけて事務所内の処理でいいじゃん。」

「そうですね・・・。」

　一瞬だけ、閉眼して端座する管理主任に目を向けてからイドゥンは曖昧に返事をした。ミソラの言う所轄とは中央政庁における、一般の機関や事業所を統括する部局のことである。お助け女神事務所に属する女神が業務上人間界等で事故を起こした場合、運営規定で定める所の保障を行わなければならない。それが第六二六八条であるが、事務所の予算で保障が効かないほどの事態であれば中央政庁に協力を要請しなくてはならない。いわゆる公的支援である。ちなみにその保障とは契約者を含む人間たちの記憶の消去や人為的な建築物または山脈等自然地形の崩壊を完全復旧する、つまりは「無かったことにする」ことなのだが、これが言うほど簡単なことではないのだった。

「ベルダンディー。」

　目を開ける事無く管理主任が呼びかけた。呼ばれたベルダンディーよりも、むしろアンネローゼと今まで軽口を叩いていたミソラの方にこそ緊張が見て取れた。

「確認しておきたいことがあります。」

「何でしょう。」

「今回の評価者は二級神イクーでしたわね。これは降臨前にあなたが指名したのですか？」

「はい。」

　返答にほんのわずか一瞬の間が空いたことを会議室にいた全員が気づいた。そしてベルダンディー自身にも気づかれたことが明らかにわかった。女神は嘘に敏感なのである。
「計画書と評価票において必要エネルギー数値に百倍の誤差がありました。管理課でこの数値の再評価を行う前にプログラムを発動させる結果に至ったこともあなた自身の責任であると報告書に記載されていますが、これは二級神イクーの初歩的なミスによるものではないのですか。」
「彼女に心的負担（プレッシャー）を負わせてしまった責任がわたしにあります。」
「救済担当者であると同時にあなたにはリーダーとして部下への指導責任がありますのに、その能力を欠いていると判断しても良いかしら。」
「管理主任、それって言い過ぎ・・・。」
　立ち上がってベルダンディーを擁護しようとしたミソラだったが、管理主任ににらまれて言葉が続けられなかった。そのまま座り直したミソラを無視して、彼女はベルダンディーに向き直った。神格が高く経歴（キャリア）豊かな管理主任は、所属する女神たちにとっては時に女神総長より恐ろしい存在である。
「ベルダンディー、あなた確かガウディ教授のゼミを聴講していましたわね。」
　管理主任がある理系専科学校の建築工学部で教鞭を執る非限定神の名を出した。
「はい、その通りです。」
　ベルダンディーは静かにうなずいた。
「論文提出の締め切りが近いと聞き及びましたが。」
「つまり、仕事を早く切り上げて論文執筆の時間を設けたかった。そのために経験の浅いイクーに対し事前に評価方式の指導を与えておいたのが、逆に彼女に余計な緊張を強いることとなってしまったと。あなたの作成した報告書を読み込めばそういう事になりませんかしら。」

「はい。」
ベルダンディーの声がかすれた。報告書の記載に虚偽があったかのような言い方は屈辱的であったが、彼女は弁明しようとはしなかった。管理主任がさらに続ける。
「限定解除を目指す意気込みやよしと言って差し上げたいところですが、実務の方をおろそかにしてしまうようでは資格無しとも取れますわね。学校に戻るか昇格を諦めるか、一度ゆっくり考えた方がよろしいのではございませんの。」
「そんな言い方はあんまりです。」
アンネローゼが小さく訴えたが、答えたのはベルダンディーの方だった。
「いいんです、アンネローゼ。管理主任のご指摘をわたしは肝に銘じておくべきだと思います。」
「良かったこともちゃんとありましたよ。」
それまで黙っていたフレイアが話しに割って入った。速記に優れたフレイアは会議の際書記を務めることが多く、また普段からあまり多くを語らない性格であった。
「まだわたくしの話しが終わっておりませんわ。」
「あんまりベルダンディーをいじめると、またセックが仕返しに来ますよ。」
「セックは関係無いでしょう。」
フレイアもまた一級神二種限定解除の神格を持ち、職階を別にすれば管理主任と唯一同格の女神である。事務所内では主任が剛直に責めることのできないただ一人の女神であった。事務次長イドゥンの場合は管理主任の主張にいつも真っ向から反論するのでアンネローゼやミソラに期待を寄せられるのだが、今日のところは立場上一方的にベルダンディーの肩を持つわけにはいかず発言を控えていた。フレイアが口を開いたのも、イドゥンのそんな気持ちを察してのことだった。
「経理主任にお尋ねしますが契約者は、何と言いましたか、いわゆ

る医局に収容されたのですよね。」

　現場で事務次長から帰還を命じられたベルダンディーは、老人を安全な場所に下ろしその場を去ることになったのだった。事故発生後むやみに現場に干渉してはならないからである。

「その通りです。しかし外傷等は一切無く担当医の初見によれば健康状態が極めて良好と・・・評価票の、願いを叶える前の健康状態の数値と違いますね。」

「おそらく空中に待避していた時ベルダンディーと密着していたことによる副作用なのでしょうね。」

　フレイアは文書作成器（ワープロ）から目を離す事無く、自分の発言も記録していった。今時文書作成機能しか持たない端末を使う女神は他に誰もいないのだが、彼女は就職祝いに兄からもらったこの器械を大事に使っていた。ちなみにフレイアの兄たる神物（じんぶつ）もアスガルドの最高評議会の一席を占める幹部神なのである。

「契約者はかつて所有していた温泉旅館を買い戻してはいましたが、経済的事情により再建するには至っていませんでした。みなさんは本件で建物の崩壊を事故と考えていらっしゃるようですが、別の見方をすれば古い建物が無くなったので次の使用者には解体の負担が無くなったと言うことができます。温泉の湧き出る更地があればそこを新たに買い取ろうとする人が現れる可能性がある、そうなれば契約者は余生を無事過ごすだけの収入を得ることになるかもしれません。」

「それって、今回の件は事故じゃないって認定できるってことよね。」

　ミソラが喜色を上げてフレイアの発言に反応した。そうなればベルダンディーが責任を問われることはない。だがフレイアはミソラの興奮に同調しなかった。

「そんな見方もできると言うことですよ。先ほどもあった通り広域的な被害は存在しているですから。本件の評価はバランスを十分に配慮しなければならないと思います。」

フレイアに合わせ、ベルダンディーを除くその場にいる全員がイドゥンを注目した。糾弾する管理主任に擁護姿勢のアンネローゼとミソラ、両者の意見の折り合いをつけようとするフレイア。経理主任は一度失った地位を回復してもらったことがあり事務次長の意思には従う姿勢を明確にしている。みながイドゥンの判断を待っていた。

「六二六八条を一部適用します。建物の崩壊は是正しませんが土石流災害についてはこれをわたしたちの力で復旧、契約者と住民たちの記憶も消去します。」

つまりある日突然つぶれた旅館が跡形も無く消えてしまったという超常現象を引き起こすのだ。災害跡地では買い手がつくか危ぶまれる。

「ただし業務記録にはベルダンディーのミスとしてこれを残し、女神総長と所轄にはわたしから報告いたします。女神総長が運営から離れられた途端に不祥事を隠蔽(いんぺい)したなどと他機関から後ろ指を差されるようなことがあってはなりません。ベルダンディーの処分については、運営規定第五四七条と彼女自身の上申に基づき今四半期の報酬を二五パーセントカットします。これは地上界への保障経費の一部に充てます。」

アンネローゼとミソラが顔を見合わせた。私情を挟むまいとする事務次長の意向は彼女らも理解しないではないが、それでは管理主任の主張をそのまま入れてしまうようで納得できない。イドゥンが発言を続けた。

「管理主任にはベルダンディーの業務姿勢に批判をお持ちのようですが、わたしは必ずしも同意できません。ベルダンディーが困難な道に果敢に挑んでいることをわたしは知っています。また学生のころから彼女がそういう神(ひと)となりであることを知っているからです。わたし自身も含め、みながベルダンディーの姿勢を見習うべきと考えています。」

管理主任がその顔に冷笑を浮かべたが、それはそれで美しい表情

ではあった。
「甘い、と申し上げたいところですが次長の判断を評価いたしましょう。今日のところは、ですが。」
　尊大な口ぶりは悪意があるように聞こえるが、基本的に物事を厳しく見る管理主任の思考の表れと言うべきであろう。イドゥンは管理主任の返答を敢えて無視した。ケンカは後でもできる。
「人間界への対処はサービス課に任せたいと思いますが、フレイア、ご意見を。」
「ベルダンディーのチームで実施していただくのがよろしいでしょう。本日の各班の業務の振り分けを再考いたします。二人ともそれでよろしいですね。」
　サービス課筆頭であるフレイアの言葉にアンネローゼは静かにうなずき、ミソラは「異議なーし」と声を上げてみせた。
「では会議はこれで終了します。みなさん、業務に戻ってください。」
　事務次長の言葉に、ベルダンディーはもう一度深々と頭を下げた。経理主任は早々と席を立ち、サービス課の二人はベルダンディーを促して会議室を後にした。

前編（後書き）

後編へ続く

後編

三人はテラスに出ていた。ここは事務所でも喫煙を認められた数少ない場所の一つである。愛煙家のアンネローゼが一服したいと言い、仕事に戻る前に一休みすることにしたのだ。アスガルドでも禁煙の風潮が広まりつつあり、先日も煙草の値上げが中央政庁厚生部局から通達されたばかりである。もっともお助け女神事務所の上級職ともなれば神属の中でも労働報酬は多い方であり、アンネローゼは高価な煙草を惜しげもなくくゆらせている。

「元気出しなよ、ベルダンディー。まあ、二五パーのカットはちょっと痛いけどネ。」

あはは、と乾いた笑いをミソラは続けた。

「でもね、管理主任の肩持つ気はさらさら無いけど少し考えた方がいいわよ。あなた疲れてるんじゃなくて？」

紫煙を吐き出しながらアンネローゼが忠告した。風の基礎法術を使い煙が回らないように配慮している。二人ともベルダンディーより職歴はずいぶん永いのだが、イドゥンの人事改正により後輩が一気に同格になったことに反感を抱いてはいなかった。むしろ自分たちが事務所の運営に直接携われるようになったことに喜びを感じており、その中心にいるイドゥンが安心して仕事をできるようにベルダンディーを重用したことに理解を示していた。責任を分担する上でも彼女たちはベルダンディーの能力と神柄（ひとがら）を高く評価していた。問題があるとすれば、担った責任を果たすためにベルダンディーがかたくななまでに仕事に向き合うことである。

「さっきのことだけどね、ベルダンディー。」

アンネローゼがテラスの外に灰を落としながら話しかけた。

「あなたがいいって言うならわたしが口出すことじゃないんだけど、イクーの分まで責任かぶって本当にそれでいいの？イクーのこと、わざと報告書に書かなかったんでしょ。」

「管理主任に申し上げた通りです。わたし朝から論文のこと気にして集中力を欠いていたんです。」
「イクーが二種免許取れたばかりから処罰受けさせたくなかった？そりゃ下手して取消にでもなったらあなたのチームのシフトまた厳しくなってしまうから、自分ひとり処罰かぶってでもイクーを守った方が仕事の方は安心して回せるわ。わたしだってそうしたかもしれない。」
ベルダンディーが黙ってしまったのでアンネローゼもそれ以上は言わなかったが、内心では失敗したと思っている。ベルダンディーが今まで大きなミスをしでかしたことがなかったので、どう言っていいのかわからないのであった。
「ベルダンディーが初めて指導員についたんだから、かばってあげたくなるよね。本当のこと報告してたら管理主任に何言われるかわかったもんじゃないよ。」
柵に体を預けて両腕をぶらぶらさせながら話すミソラに、ベルダンディーの返事は彼女にしては珍しく大きな声だった。
「本当にわたしのミスなんです。イクーは関係ありません。」
そう言った途端にアンネローゼとミソラにじっと睨まれてしまった。
「え・・・あの、だからわたし嘘ついたわけじゃなくて、その・・・。」
アンネローゼが懐から取り出した携帯用吸殻入れに煙草を入れた。消す時には水の基礎法術を使う。女神は煙草をもみ消すなどという品の無い行為はしないのである。
「さっきも言ったけどあなたがいいって言うならそれでいいの。別にわたしたちもイクーのこと責めたいわけじゃないし。」
ミソラも上体を起こし襟元を直しながら続けた。
「問題はね、ベルダンディーがあたしたちにまで本音を言わないってこと。あんた、この立派なおねーさまたちをまさか信用できないって言うじゃないよね。」

「そうじゃないですけど、ただ・・・。」
「ただ・・・何？」
「おふたりともさっき管理主任に気圧(けお)されてらしたから。やっぱり主任のこと恐いでしょう？」
　ミソラの右手が瞬時にベルダンディーの腰に伸び、引き寄せるや否や後ろから抱きすくめる。
「お仕置きだね、アンネローゼ。」
「そうね、久しぶりにたっぷりとね。」
　アンネローゼがその瞳に妖しい輝きを放ち、ミソラはベルダンディーの耳元に艶っぽい息を吹きかける。
「や、やめて下さい、こんな明るいうちから・・・。」
「そんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃない、初めてじゃないんだし。ねえ、ミソラ。」
「そうだよ、アンネローゼは上手なんだから。すぐに気持ちよくなっちゃうよ。」
　ベルダンディーの瞳を正面から見つめながら、アンネローゼの右手が上着の裾から中にすべりこむ。へその回りに冷たい指先の動きを感じベルダンディーが一瞬ため息をつく。そしてアンネローゼはくすりと笑みを浮かべると、そのままベルダンディーのおなかや脇を激しくくすぐった。
「いやあ、やめてくださいー！」
　初めこそ懇願していたベルダンディーだが、あとはもう笑い声を上げ続けることしかできなかった。アンネローゼの指先が腹から背中まで這い回り、ミソラに肩と上腕を押さえられてもがいてももがいても逃がしてくれない。時折笑い声の合間に「そこは」だの「だめぇ」だのとベルダンディーが言うのがおかしくて、くすぐりはさらにエスカレートしていった。その時である。
「何やってんですか。」
　ふいに声をかけられて三神(さんにん)とも固まった。すぐそばに二級神イクーが立っており、さらにテラスの窓際には何神(なんにん)もの女神たちがいて

こちらの様子をうかがっていたからである。

アンネローゼもミソラも天女として神界に転生し、初等教育を修了後軍籍に身を置いた。天兵は魔軍との戦いのために転生させられるのであり、それは天女であっても変わりない。天人も天女も生きて前線から戻った者だけが永遠の生命を得ることができる。そこから日々享楽の中に過ごすも神への道を修練するも本人の自由であるが、神格の無い者は予備役期間を過ぎれば再び軍役が課せられることになる。再び戦地に赴きたいとは思わなかったので、二人はそれぞれ進学の道を選んだ。

アンネローゼはずいぶん苦労して学費を稼いできた。それこそあまり語れないような仕事もしてきたのだ。専科学校を卒業しお助け女神事務所に就職してから、女神総長に働きぶりを認められて取り立てられた。時に女神総長から命じられる、あまり語れないような仕事を請け負うのも彼女の任務なのである。

ミソラは高等科卒業後天上界の辺境開発公社で事務員をしていたが、ある日大型採掘機械の爆発事故に巻き込まれ重傷を負った。永年病室から離れられない生活を送っていたが、多額の保険給付を学費に充て専科学校の通信教育を受講していた。その苦労を知った女神総長が偉大なる力でミソラの肉体を完全に回復させて以来、彼女は総長に忠誠を尽くしている。

救済業務を行うサービス課において二人は人間らに着実に幸福を授けてきた。時に魔属の妨害を退け、神属のシェア拡大に大きく貢献している。その実績は高く、アスガルドにおいては「お助け女神事務所の双璧」として広く知られているほどだ。そんな彼女たちでも神格の最上級である一級神二種限定解除になるなどということは望外のことだった。それが困難な道であるのを知るからこそ、ベルダンディーの力になってやりたいと思うのであった。

「なんか楽しそうにしてる・・・。」

　イドゥンは外の空気を入れようと会議室の窓を開け、五階層下のテラスでベルダンディーたちのじゃれあう姿を目にした。彼女が会議室に残っていたのはフレイアが議事録をまとめるのを待っていたからだ。最近事故や不祥事無く業務をこなしてきたため、今回が七神による合議体制を敷いて初めての処分決議だった。だからいち早く議事録に目を通しておきたかったのだ。
「まったく呑気なものですわね。彼女たちには自覚が足りないのではないかしら。」
　隣の窓を開き腰掛ける管理主任も同じ理由で残っていたのだった。
「それにしても次長、わたくしはあなたがベルダンディーの上申した処分案をそのまま受け入れるとは正直思っていませんでしたわ。」
「中層世界（ミッドガルド）に降臨する以上わたしたちの仕事にも危険が伴います。神属だからと言って無傷で済まないことだってあるでしょうし、まして人間の生命財産に被害を与えてしまうようなことがあってはなりません。スタッフ全員の気持ちを引き締めるためにも厳しい処断が必要と考えました。ベルダンディー自身もそう考えたからこそ上申してきたはずです。」
「その点についてはわたくしも賛成ですわ。でもベルダンディーの考えはそれだけだったのかしら。」
「彼女がリーダーとしての責任を今後どう果たすかは、今回の処分を踏まえて自分で考えてくれればよいと思います。同じ過ちを繰り返すようなことは決して無いとわたしは信じています。」
　横目で管理主任はイドゥンを見やり、そんな二人をフレイアは文書作成端末（ワープロ）を打つ手を止めることなく時折眺めていた。
「そうですわね、限定解除を目指そうというのですからその程度のことは成してほしいものですわ。」
　イドゥンの表情が変わる。その表情を見てけんか腰ととらえる女神は、まだこの職場に多くはいなかった。
「一度うかがっておこうと思っておりましたが、今よろしいかしら？」

「何でしょうか、次長。」
「主任は口が悪いのか、それとも性格が悪いのかどちらでしょう。」
管理主任は驚いて二の句が次げなかった。年少の女神にこんなことを言われたのは初めてだったからだ。
「どういう意味ですの、それは。」
「会議中もずいぶんベルダンディーをいじめてらしたではありませんか。反省してる者にあんな仕打ちは普通しないでしょう。」
「事実関係を明らかにしようとしたまでのことですわ。そのような言い方は心外ですし、何よりわたくしに対して非礼ではありませんか。」
「事務次長として、部下には公平でありたいと思っておりますので。」
「おためごかしを。だいたいあなた、以前はあちらこちらの事業経営者相手に天人たちと一緒になってけんかを売っていたそうですわね。あなたこそ性格悪いのではありませんこと？」
「ええ、おかげさまでその頃に物の見方と言うものが身につきましたわ。いいものはいい、悪いものは悪い。やはりはっきりさせませんとね。」
その時フレイアが突然笑い出したので、二人は口論を中断した。両手で口元を押さえ上品に笑っているのだが、その理由がイドゥンにも管理主任にもわからなかった。
「何ですのフレイア、いきなり失礼な。」
「ごめんなさい。だって、おふたりとも何だかとっても楽しそうだから。」
「楽しくなんかありませんよ。」
イドゥンが否定してみせるが、フレイアにはそれもおかしかった様子である。
「主任、よかったですね。」
「何がですの？」
「だってあなたのけんかの相手になって下さったのは次長が初めて

ですよ。今までずいぶんと物足りない思いをなさってらしたでしょうに。」

その一言にふたりは目を見合わせた。神格同様に身長もお助け女神事務所で一番高い管理主任をイドゥンが見上げる形になる。ふんと管理主任が目線を逸らせると同時に、ふたりのポケットから携帯（ケー）端末（タイ）の着信音が鳴った。書き上がった議事録をフレイアが送信したのだった。

「お待たせしました。内容をご確認下さい。」

イドゥンも管理主任も自分のケータイを取り出し文書を開封したが、その動作が同時だったことに気がつき互いに背を向けて書き上がった議事録を黙々と読み始めた。フレイアは自分の端末を閉じると、会議室の隅に用意されていたティーセットで紅茶を淹（い）れた。

「おふたりともどうぞ。」

フレイアがテーブルに誘い、議事録を読み終えたイドゥンは再び席に着いた。しかし管理主任は、

「けっこう、仕事に戻りますので。」

と言い残すと会議室を出て行った。

「せっかくフレイアが淹れてくれたのに。やっぱり性格悪いわ。」

当のフレイアは全く気にした様子は見せない。イドゥンは一口紅茶をすすると満面の笑みを浮かべておいしいとつぶやいた。フレイアもうれしそうに微笑む。しばらくは静かに紅茶を味わっていたのだが、やがてカップを置くとイドゥンはフレイアに尋ねた。

「ベルダンディーは自分で全部責任をかぶろうとしたんですよね、やっぱり。」

「そうでしょうね。」

「彼女が嘘をついたとフレイアは思いますか？先程の会議で管理主任はおそらくそこを責められようとしたと思いますが、フレイアが話しを継いで下さったお陰で言及されずに済みました。」

イドゥンの口調は、職階では彼女の方が上であるが上位神であるフレイアに対し丁寧な言葉遣いになる。無論管理主任に対しても言

葉遣いに気をつけてはいる。仕事のみならず所属女神たちの生活態度からスカートの長さにまで口やかましい管理主任と違い、フレイアは何事にも鷹揚に構えイドゥンが困った時には丁寧に助言をくれるのだった。
「ベルダンディーが奉職したころわたしは彼女とあまり話をする機会が無かったのですが、その頃にはもう限定解除を目指すつもりだったでしょうかしら。」
「わたしも卒業してからはこちらに再就職するまで彼女と会うことがありませんでしたから何とも言えませんが、学生のころも将来のことについてあまりはっきり語ったことは無かったと思います。ただ・・・。」
「研究機関に進むような意向も見られなかった？」
「ええ、あの時点で限定解除を目指すのならそういった進路を取った方がいいですよね。ベルダンディーは首席でしたからその気があれば可能な選択だったと思いますが。」
「何なのでしょうね、ベルダンディーを駆り立てるものは。口に出さないだけにとても強い思いを持って苦難に臨んでいることは明らかですが。」
　手にしたカップを揺らし琥珀色の波を見つめるフレイアの表情を見ていて、イドゥンは急に心臓が高鳴るのを感じた。物静かで深い知性をにじませるその顔立ちは、同性から見ても美しく官能的ですらあった。
「これはわたしの単なる想像なのですが。」
「な、なんでしょうか。」
　見とれていたイドゥンの返答が少し遅れた。
「今日のミスの原因が何であれ、彼女は自分を律するものに忠実であろうとしたことでしょう。だからこそ、その責任を誰でもなく自分に課したのではないでしょうか。」
「ベルダンディーにとって、責任が自分にあるとの発言は嘘ではないと。」

「あれは嘘ではなく強がりというのではないかしら。」
フレイアはカップを皿（ソーサー）に戻した。その仕草は静かで優雅なものであった。
「管理主任は極めて冷厳な方です。彼女から見ればベルダンディーは嘘をついたと言えるでしょう。そして、わたしがそうは見ていないことを感じ取ったからこそ彼女はベルダンディーを追及しなかったのです。わたしとの口論になれば千日戦争（てづまり）になるのは目に見えていますからね。」
「フレイアは、ベルダンディーのことをどう見ていらっしゃるのですか？」
　イドゥンの問いに、フレイアは上目遣いに視線を返した。細めた瞳の美しさに魅了されていたイドゥンの背筋に電流が走った。しかしその感覚が初めて女神総長に謁見した時に感じた畏怖と同種のものであったことを、イドゥンは自宅に帰ってから思い起こしたのである。
「ベルダンディーはまだ子供ですわ。ですから次長、あなたが支えてあげて下さいまし。」

　テラスではアンネローゼとミソラが集まっていた部下たちを追い立てるようにサービス課のオフィスへと戻っていくところだった。ベルダンディーは部下である二級神イクーとふたり残っていた。思いつめた表情のイクーがおもむろに頭を下げる。
「先輩、すみませんでした。」
　イクーには、と言うよりも誰にも先刻の会議の結果は伝えられていない。後ほど事務次長が正式に発表するはずである。事故の後ベルダンディーは事後処理のため立ち回っていて、イクーも管理課からの聞取り調査を受けていたため話しをすることができなかった。それだけにイクーの不安は強かったに違いない。
「後で発表されることですけれど、とりあえずあなたには伝えておきますね。今回の事故についてはわたしの責任です。イクー、

あなたへの処分は何もありません。」
「そんなあ。」
イクーがベルダンディーに詰め寄り、泣きそうな顔で問い質す。
「だって、わたしのミスです。管理課の女神（ひと）にもちゃんとそう言いました。先輩ちっとも悪くないじゃないですか。」
「わたしの担当案件です。それにあなたは正式に二種免許を取得したとは言え、業務についてはまだわたしの監督下にあります。指示指導の不行き届きの責任を逃れるわけには参りません。」
これじゃなぐさめにはならないわね、とベルダンディーは思った。案の定イクーは余計に肩を落としてしまった。
「イクー、明日からはあなたにもアクセスブースに入ってもらいます。いよいよ、人間たちの願いを聞き彼らに幸福を授ける任務に当たってもらいますからそのつもりで。」
「え、だって・・・。」
「あなたはその仕事に就きたいからお助け女神事務所に就職したのではなかったのですか？」
こんな日でなければ、純真なイクーは飛び上がって喜んだに違いない。しかし今は複雑な表情を浮かべてベルダンディーを見つめている。
今日の明日にイクーを正式に救済任務に充てると言えばイドゥンは心配するだろうか、管理主任にまたお小言のひとつも言われてしまうだろうか。そんなこともベルダンディーの脳裏をよぎったが、今の彼女に気落ちした部下を励ます言葉が他に出てこなかった。これはリーダーであり指導員であるベルダンディーに決定権のあることであり、他者から覆（くつがえ）される種のことではない。イクーの能力について心配の声があろうことは予想するが、時期尚早とは言えないのも事実である。
「できるでしょうか、わたしに。」
不安を口にするイクーに向かって、ベルダンディーは自然に笑顔を向けた。

「がんばって下さい、とお願いしてもいいですか？」
　事務所に勤める女神たちの中でもイクーはひときわ小柄で、ベルダンディーとも頭ひとつ分以上背が低い。三つ編みにした栗色の髪にブレザーの様な神衣の腰に大きなリボンをつけていて、子供っぽい容姿を本神(ほんにん)もコンプレックスにしている節がある。奉職して以来気の小ささから無用の失敗を重ねてきたが、それでもベルダンディーはイクーのひたむきさに好感を覚え、その長所を伸ばそうと指導してきたのだった。
「先輩の、いえ一級神ベルダンディーのご期待に背かぬように、命に従い全力を尽くします。」
　笑顔のまま、ベルダンディーは右手を差し出した。イクーも右手を差し出し力強く握り返した。こうして決意してくれたのであれば、今日の事故も無駄にはならないだろう。
「この後はフレイアの指示に従い私たちのチームで事故処理に当たります。先にオフィスに戻ってセックたちに伝達して下さい。」
「はい。」
「わたし、もう少しだけここで休ませてもらいますから。」
　イクーはもう一度頭をさげると、踵(きびす)を返してベルダンディーの前から立ち去った。その姿が見えなくなってから、ベルダンディーは柵に背中をもたれさせて大きくため息をついた。ようやくひとりになれたことを安堵する気持ちに一瞬だけ罪の意識を感じたが、それでも今日は緊張し通しで疲労感の方が勝っていたのだ。
　今日自分はどれだけ嘘をついてしまっただろう、必要とは感じながらもいつわりを口にしたことを恥じる気が彼女の疲労を高めていた。それこそアンネローゼやミソラが危惧するベルダンディーの過度の生真面目さであり、フレイヤに強がりと断じられる所以(ゆえん)である。そして、もうひとつ彼女には心配事が残っていたのだ。
「二五パーセントカット・・・か。」
　減俸は自分でも言い出したことである。就業規則に則った処分が必要であるし、イドゥンの気持ちに負担をかけないようにと配慮し

たつもりだ。ベルダンディーも少なからぬ報酬を得ている身であり、つつましく暮らしているので減俸でたちまち生活が苦しくなるようなことはない。だが積立や保険料のことを考えると二五パーセント減収というのは小さい数字ではなかった。

もうひとつ、進学を控えた妹のこともあった。永く遠方の親元にいて教育機関に通わず両親から初等科教育を受けていたため、中等科入学に際して試験を受ける必要があった。現在その妹と、もうひとり姉と一緒に暮らしている。姉と共に妹の面倒を見ながら、試験に備えて予備校に通わせていた。その予備校は私塾であり公的な教育保障の対象ではない。それに中等科の寮に入ることになるとは言え、妹の新生活のために何かとそろえてやらなければならない物もあった。

先だって帰省した折、ベルダンディーは些細なことで母親と口論をしてしまった。その挙句にである。

「全部わたしが準備しますから、母さんには何もしていただかなくて結構です。」

妹の入学までの費用を全て自分が負担すると言い切ってしまったのだった。姉が何度も取り成してくれたが、あの時どうしても母にわびる気になれなかった。妹が首都に上って来てから姉までが何やかやと理由をつけて同居を申し出てきたのは、多分母親と相談してのことなのだろう。家財道具のカタログを取り寄せては妹と肩を並べて選んでいることがあり、ねだる妹に気前のいい返事をする姉を見てベルダンディーは素直に感謝の言葉を口に出せない日々が続いていた。

「しばらくはお弁当ね。」

背中をテラスの柵にあずけ、空を見上げながらつぶやいた。無論ベルダンディーは女神であるので、食事を摂らなくても生活に差し障りは無い。この場合のお弁当というのはアスガルドの慣用句であり、何事も手元の物で済ませ購入を控えるということである。姉に相談しなくても、いざとなれば定期をひとつ解約すれば何とかなる

はずである。
そう思ったら心配は吹き飛んだ。まだ自分にはしなければならないことがある、いつまでも悩んではいられない。背筋を伸ばしのけぞった姿勢から、反動をつけて前へ踏み出す。しなやかな下肢に力をこめてほんの数メートルほど跳躍し、ベルダンディーはそのまま歩いて棟内に入った。この日の仕事はまだこれからなのである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5818i/

北天女神譚異聞～強がりの代償～

2010年10月8日12時01分発行